機動戦士ガンダム00　堕天使の慟哭

零崎極識

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２３０７年、化石燃料が枯渇し新たなエネルギーを得た人類は、ひとつにまとまることが出来ずに３大国の威信を示すためにゼロサムゲームを続けていた。そんな彼らに対し、紛争根絶を掲げる私設武装組織『ソレスタルビーイング』が立ち上がった。

ユニオンに所属する主人公は、この混沌とした世界の流れに巻き込まれることになるのだった。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 6
第3話 …… 11
第4話 …… 16
第5話 …… 21

第1話

西暦２３０７年。

化石燃料は枯渇したが、人類はそれに代わる新たなエネルギーを手に入れていた。３本の巨大な軌道エレベーターと、それに伴う大規模な太陽光発電システム。しかし、このシステムの恩恵を得られるのは、一部の大国とその同盟国だけだった。

３つの軌道エレベーターを所有する３つの超大国群。アメリカ合衆国を中心とした『ユニオン』。中国、ロシア、インドを中心とした『人類革新連盟』。ヨーロッパを中心とした『ＡＥＵ』。各超大国群は己の威信と繁栄のため、大いなるゼロサム・ゲームを続ける。そう、２４世紀になっても、人類は未だ一つになりきれずにいたのだ……。

□□□□□□□

その日、ユニオン軍の技術者である『アルフォンス・クレンズ』は頭を抱えていた。なんでも、近々ＡＥＵが新型のモビルスーツをお披露目するらしいという情報が耳に入ったからである。

「やあ、どうしたんだい？そんなに頭を抱えて」

「ビリーか、いや、なんでもないんだ」

部屋に入ってきた、長年の付き合いである同じくユニオン軍の技術者『ビリー・カタギリ』が見かねた様子で声をかけてきた。アルフォンスはひとしきり頭をかいた後に一通の招待状をビリーに見せる。

「なんだ、君にも来ていたのかい」

ビリーはそう言いながらアルフォンスが貰ったものと全く一緒の招待状を取り出した。どうやら、彼にも招待状が来ていたらしい。

「カタギリ、明日の出発についてだが……と、クレンズ、君にも招待状が来たようだな」

遅れて入ってきたのはユニオンきってのエースパイロットである『グラハム・エーカー』だ。彼にも招待状が来ていたようで、アルフォンスはますます頭を抱えるのだった。

「君たち2人が揃うとろくなことにならないからね……」

ユニオン軍が発足して、新型モビルスーツである『フラッグ』の開

発に携わったアルフォンスとビリー。そして、その機体のテストパイロットだったグラハム。この３人が仲良くならない訳ではなく、暴走気味のグラハムを宥める役割のビリーとアルフォンスである。
　ため息をつきながら明日の出発のための準備をするアルフォンス。だが、このお披露目の機会が、グラハムとビリー。そしてアルフォンスの運命を変えるということには誰も気づかなかった。
□□□□□□
　無事に出発できた３人はお披露目当日、会場であるＡＥＵの軌道エレベーターに到着していた。目の前ではＡＥＵの新型である『イナクト』が次々と現れる的を撃っていた。
「まったく……このようなお披露目だとはな。それにどことなくフラッグを真似ているようだな」
「無理もないよグラハム。なんせ、ユニオンのフラッグは最先端だからね。こんなのは猿真似にしか過ぎないよ」
「まぁ……性能的には近づけただけでそこまでは高くなさそうだがな」
「おい！そこ！聞こえてんぞ！」
　三者三様の意見を述べるとイナクトのパイロットの声がスピーカー越しに聞こえてきた。
「どうやら、集音能力は高いみたいだ」
「みたいだね」
　すると、双眼鏡を覗いていたアルフォンスが上空から接近する一機の機影を確認した。
「ん？カタギリ、新型は一機だけだよな？」
「そうだけど、どうしたんだい？」
「……あれを見てみろ」
　グラハムの示す方向に目を向けると軌道エレベーター沿いに何かが降りて来ているのが見える。遠目から見てもその物体は四肢がありまるで人のようだ。
「あんな人型に再現出来る……そんなものは……」
　アルフォンスはボソッと呟きその言葉に頷くようにビリーが言葉

を紡ぐ。
「間違いないよ、ＡＥＵや人革連の兵器じゃない……」
そして地面に着地した物体はゆっくりとイナクトの方を向く。
「おい！そこのお前！ユニオンか？人革連か？どっちにしたって人様の領土に勝手に入ってきてるんだ、ただじゃ済むわけないよな！」
イナクトのパイロットはソニックブレイドを選択し、抜き放つ。その振動は観客席にも響き、アルフォンスたちは苦悶の表情を浮かべる。だがイナクトのパイロットは意に返すことなくソニックブレイドを突き出す。次の瞬間、所属不明機は右腕に装備していた剣を展開し、逆袈裟に振るう。
わずか一瞬のうちにイナクトの右腕が切り飛ばされ地面に落下する。あまりにも華麗な一撃に誰も声を上げることが出来ずに呆然としてしまった。所属不明機は肩口から何かを抜きもう片方の腕も切り飛ばす。
「なっ！ビームサーベルだと!?」
現代の科学力では実現不可能と言わているビームサーベルでイナクトの腕を切り飛ばしたのだった。
「俺は！」
剣が閃き、イナクトの頭部が切り裂かれる。
「スペシャルで！」
次は左足を。
「二千回で！」
そして、次は右足を。
「模擬戦なんだよぉ!!」
最後に胴体を切り飛ばされてイナクトはバラバラに地面に落ちるのだった。
「……失礼！」
グラハムはいち早く復活し、高官の人から双眼鏡を拝借するとその機体をじーっと観察する。
「……ガンダム……」
「ガンダム？」

「ああ、奴の機体の額に書かれている名前だよ」
アルフォンスはその名前を聞いてほんの少しだけ笑みを浮かべるのだった。
「……ガンダム……か」
それは後の人生を大きく変えるターニングポイントとなったのだった。
□□□□□□
そしてこの日、全世界に対して戦争根絶を目的とした私設武装組織『ソレスタルビーイング』が武力介入を開始した。
『地球で生まれ育った、全ての人類に報告させて頂きます。私達は、ソレスタルビーイング。機動兵器「ガンダム」を所有する、私設武装組織です。
私達、ソレスタルビーイングの活動目的は、この世界から戦争行為を根絶することにあります。
私達は自らの利益のために行動はしません。
戦争根絶という大きな目的のために、私達は立ち上がったのです。
只今を以って、全ての人類に向けて宣言します。
領土・宗教・エネルギー、どのような理由があろうとも、私達は全ての戦争行為に対して、武力による介入を開始します』
ソレスタルビーイングの代表者であろう『イオリア・シュヘンベルグ』の演説は全世界の人々に対し、様々な感情を抱かせるのだった。
□□□□□□
「ははは！紛争根絶を掲げる組織が武力を振るうなど、とんだ矛盾もあったものだ！」
記念式典の会場から移動する途中の車内で、グラハムが笑っていた。ビリーはさっきの『ガンダム』という機体のことを推測、判断しているがあまり芳しくないようだ。
「でも……彼らは我々以上の技術力を有しているということだね」
「そうだな、ふっ……興味を抱くよ」
グラハムの目は恋にこがれた少年のような好奇心を浮かべていた。
「どうやら、お迎えのようだ」

正面から1台の車がこちらに近づき停止する。中からはユニオンの軍服を着た兵士が降りてきた。
「グラハム・エーカー中尉、ビリー・カタギリ技術顧問、アルフォンス・グレンズ技術少尉、ＭＳＷＡＤへの帰投命令が降りました」
「了解した、その旨を良しとする」
こうして、彼らはユニオンへと召喚され新たな指示を受けることになったのだ。

第2話

「それにしても……本国は余程ガンダムのことを気にかけているみたいだね」
　あの後、ヨーロッパのホテルに戻り1泊した後にＭＳＷＡＤへ戻る日程になり、彼らはホテルでゆっくり休むことになった。ビリーとアルフォンスはそれぞれの見方から解析をしようとし、グラハムは日課の筋トレを行っていた。
「こんなに早く新設の部隊ができるとはな」
　既に移動のあいだに内示が出て、新設部隊への異動が決まっていた。それだけではなく所属させる人員も選べるという特殊事情である。
「これで成果を上げられなかったら笑いものだな」
　アルフォンスはため息混じりにそう呟く。その不安を振り払うようにグラハムが豪快に笑い飛ばした。
「ふはははー!このグラハム・エーカーがいるのだ、負けるはずはなかろう」
「……随分と自信があるんだね」
　ビリーは呆れたようにグラハムに言うがそこには笑みが浮かんでいた。
　そして、夜が更け彼らはＭＳＷＡＤへの帰投の途中にガンダムと遭遇するのだった。
「……ん?正面の方向に機影を見つけたよ?」
「こんな空域に……誰だ?」
　グラハムはすぐにパイロットスーツに着替える。
「ビリー、フラッグを出す」
「この状況でかい?」
「実際に相対して見ないとわからないこともあるのでね!」
　そう言うとすぐに輸送機のコンテナへと向かっていった。
「……君はいいのかい?」
「ふっ、俺はグラハムほどのテクニックはないしな。おまけに積んで

るフラッグは1機だけだ」
アルフォンスは苦笑いを浮かべながら出撃するグラハムを見届けるのだった。
□□□□□□
「さぁ、君の力を見せてもらおうか……！ガンダム！」
グラハムは飛行形態でガンダムに接近していき小手調べでリニアライフルを撃つ。相手のガンダムは鋭い軌道で易々と避けるあまりか、右手に装備した剣を展開しフラッグへと振りかぶる。
「そう来るか！ならば人呼んで、グラハムスペシャル！」
グラハムはその剣に応戦するために無理やり空中で変形し機体の空気抵抗を増やして減速する。ガンダムはその挙動に驚いたのか一瞬だけ動きに迷いが出てしまった。
「これでどうだ！」
剣を振りかぶった後のガンダムに対し、ソニックブレイドを抜きガンダムへと迫る。だが、ガンダムはその振りかぶった勢いを利用して機体を回転させると反対側の肩からビームサーベルを抜き、フラッグの右腕を切り裂こうとする。
「ビームサーベルだと!?」
想像していなかった武器に迷いが生じ回避運動が遅れたせいでフラッグのライフルが切り裂かれてしまった。
「しまった……！ここは引くしかあるまいか……！」
これ以上の追撃は無意味と判断したグラハムは機体を反転させると飛行形態へ変形させ輸送機へと戻っていく。その後ろ姿を見届けることなくガンダムはその場を去っていくのだった。
□□□□□□
帰ってきたグラハムを見てアルフォンスとビリーは驚いた表情を浮かべていた。
「まさか……新型の機体と戦ってこれだけの損害で済むとは……」
「やはり、グラハムはすごいね」
そして輸送機に無事着艦したグラハムは少しばかり落ち込んだ様子でブリッジに上がってきた。

「ライフルを失ってしまった……始末書ものだな」
「いや、これだけのデータはフラッグを1機落としてもお釣りが来るよ。この塗料の追跡をすれば分かることもあるだろうしね」
「そうか……それにしてもガンダムのパイロットは若いな」
「……まさか話したのかい？」
「いやいや、動きが真っ直ぐだったからな」
　グラハムはガンダムへの興味をより深めたようでいよいよ、手につけられなくなってきそうだった。
「そうだな、そしてあの時にどうしてレーダーが使えなくなったのかの理論もおおよそ掴めた」
　アルフォンスは今回の戦いでどのような特性があるのかをほとんど知ることが出来ていた。
「おそらくは背面から出ている特殊な光が原因でレーダーに障害が発生するのだろう……そして、ガンダムがビームサーベルを持っている理由。これもあの光の応用だとすれば説明できるしな」
「なるほど、君の理論は理にかなってるね」
　アルフォンスの説明にビリーは頷く一方グラハムは既に聞く耳を持っていなかった。
「……グラハム、興味無いのは分かるけどちょっとぐらい聞いてくれよ……」
「そういう難しい話は私の性分ではないのでね」
「やれやれ……」
　アルフォンスは肩を竦めながら今回わかったことを端末へと纏め始めるのだった。
　しばらくして無事に司令部へとたどり着くと真っ先に司令室に通された。
「よく来たな、今回君たちには『対ガンダム調査隊』と言う新設の部隊に君たちを配属しようと思ってな。内示にも示したように、人員、兵器、なんでも優遇しよう」
「その代わり、ガンダムを鹵獲しろ……ということですね？」
「ああ、本国はこの件を重く見てるようでな」

「分かりました」
「うむ、それと……アルフォンス君、君は残ってくれたまえ」
「はっ、かしこまりました」
　基地司令の指示を受け先に退出するグラハムとビリーを見送り、アルフォンスは司令の前で気をつけの状態で待機する。
「アルフォンス技術少尉、君には対ガンダム調査隊ではなく違うものに配属だ」
「……といいますと？」
「まさか私が君の家系のことを知らないとでも思っているのかね？」
「……なるほど、そういうことですか」
　アルフォンスは苦虫を噛み潰したような顔を浮かべ司令を見る。
「君にはある程度自由な権利を与える代わりに、ユニオンでガンダムと同等、あるいはそれ以上の機体を作り上げることをしてもらう。その為には、テスト運用も構わん」
「体のいい駒ってことですか？」
「いいや、君には期待しているということだよ」
　そして、司令から退出を促されるとそのまま部屋を出て自分の部屋へと向かう。中に入ると携帯端末を開きとある連絡先へと電話をかける。
「……もしもし、私だ。ああ……予定通りに事は進んでいる。……そうだな、これからが勝負だな……」
　そして電話を切ると服を着替えて車のキーを取り足早に部屋を出るのだった。

□□□□□□

　部屋を出たアルフォンスは寄り道せずに自分の家へと向かう。幸いなことに帰宅ラッシュなどに巻き込まれることなくスムーズに到着した彼は車を停めると地下へと足を向ける。
　個人の家に置くにはもったいないほどのエレベーターを用いて地下へと行き奥にあるシャッターを開ける。すると、そこには一体の巨大なモビルスーツが鎮座していた。

「……ガンダムフラウロス……お前の出番が来たぞ」

そこに眠るガンダムは出陣のときを今か今かと待ち構えていたのだった。

第3話

「ガンダムフラウロス……お前の力はどこまで通用する……？」
　アルフォンスはそこに鎮座するガンダムに語りかけながらコックピットへと乗り込む。計器に灯を入れコンピューターを付けると無事に起動する。
「パワーユニット異常なし……よし、行けるな」
　アルフォンスはフットペダルを踏み込み格納庫からゆっくりと飛び立つ。機体を浮かせるとそのままユニオンの基地まで飛んでいき着陸させる。未確認機が着陸したため基地の中が慌ただしくなるが基地司令がすぐさま、臨場した。
「アルフォンス君……君は無茶をするな……」
「あっはっはっ、何をしてもいいと言われたのでですね。ひとまずはこの機体をこちらに置かせてもらっても？」
「ああ、構わんよ」
　そして、アルフォンスの乗ってきたフラウロスは格納庫に格納され、再び司令官と司令室でマンツーマンになった。
「あの機体……あれはまるでガンダムではないか」
「そうですね、私の家系では代々ガンダムと呼ばれるようなモビルスーツを作ってきました。ですが……あのような兵器は私は知りません」
「それだとしても……君の機体があればユニオンはソレスタルビーイングに勝利することができるな」
「……しかし、彼らのガンダム全機に勝てるかどうかは分かりません」
　実情は世界には彼らのガンダムが４機確認されているのに対し、こちらはアルフォンスのガンダムのみと戦力的には厳しそうではある。
「……やはり、世界はひとつになり彼らを打倒するしか……」
「そうだな、君の言う通りかもしれん。既にユニオンの上層部では極秘裏に人革連との接触を計っている」
「人革連とですか……!?」
　仲の悪いとされている大国２つが近づくことになれば世界はやが

て統一化へと進んでいくのだろう。これもやはりソレスタルビーイングの影響だと言える。
「とにかく、その機体は君が扱え。そして、ソレスタルビーイングを圧倒せよ」
「はっ、必ずや勝利してみせます」
アルフォンスはそう言うと部屋を退出するのだった。
□□□□□□
「アルフォンス、君のその機体の力をこの私に見せてもらいたい！」
「……グラハム、正気か？」
廊下を歩いているとグラハムに呼び止められ開口一番にそう言われた。
「ガンダムに勝つためにはガンダムとの戦闘経験を積めば良い。幸いにしてここにはガンダムがある！だからこそ、私と戦ってくれ！」
アルフォンスは深いため息をつき仕方なくグラハムとの模擬戦に応じることになった。
「……俺とグラハムとの戦いの記録、確か全部俺が負けていたよな」
「技術職も兼ねている君に負けるわけにはいかないのでな」
フラッグのテストパイロットの時はグラハムとの模擬戦において勝ったことのないアルフォンスだが今回は機体の性能差が圧倒的である。
「ではこれより、グラハム・エーカーとアルフォンス・クレンズとの模擬戦を開始する」
オペレーターの合図とともにグラハムのフラッグが突っ込んでくる。
「まずはお手並み拝見といこうじゃないか！」
「そうはいかない……！」
フラウロスは肩にあるフィンスラスターを使い、一瞬でフラッグの背後をとる。
「何という機動性！」
フラッグは後ろを振り向くことなくそのまま距離をあけようとするがそれよりも先にフラウロスの方が早い。

「逃がしはしない！」
　フラウロスはビームライフルを構えフラッグの肩を狙ってトリガーを引く。放たれた一筋のビームは狙いを外すことなく肩を撃ち抜きフラッグの体勢を崩した。
「しまった……!?」
「もらったぞ！」
　背後のスラスターを噴射させ一気に距離を詰めると背中のバックパックからビームサーベルを抜き袈裟に振り下ろす。フラッグもソニックブレイドで対抗しようとするが一瞬の抵抗のうちにソニックブレイドが両断され、それを持っていた腕ごと切り裂いた。
「そこまで！」
　ここで戦闘終了の判断が下され、互いの機体を格納庫へとしまう。
「それにしても……君のガンダム、あそこまで性能が高いなんてね」
「それでもソレスタルビーイングのガンダムに勝てるかどうか……」
「いずれにしても、私はガンダムにフラッグで挑むさ」
　戦闘を終え、リフレックスルームでそんな会話をしていると若い隊員が伝令として走ってきた。
「伝令、グラハム・エーカー中尉、アルフォンス技術少尉、お二人に出撃命令が下されました！」
「了解した、直ちに向かう」
　２人は空き缶を捨てるとすぐさま自分の機体へと向かっていった。
□□□□□□
「タリビアで反政府デモだと……？」
「ああ、我々はそれを鎮圧しに行くということだ」
　オペレーターからのブリーフィングを受けながら情報をまとめる。端的に言えば、ユニオンから独立したいタリビア軍が軍を持ち出しユニオンに対し要求をしてきたようだ。
「これで、対応しなければユニオンの面目は丸潰れってわけだ」
「……だが、対応すればしたでユニオンはソレスタルビーイングの介入を受けてしまう……」
「どう出るかは分からないが、丁度いい機会だと思うさ」

アルフォンスは不敵な笑みを浮かべながら機体に灯を入れる。
「ガンダムフラウロス、目標を撃滅する」
輸送機からフラウロスが空へと舞い上がり、機体を変形させると戦闘機のようにタリビア軍が展開する地域へと飛翔していく。
しばらく飛翔するとタリビア軍が既に攻撃を受けているようで過半数のモビルスーツがガンダムによって撃破されていた。撃破したのはモスグリーン色をした奴のようで、その手に持ったライフルがアルフォンスの機体をロックしていた。
「熱烈な歓迎だな……！」
すぐさま、スラスターの出力を上げ機体を加速させるとその後ろをビームが通り抜けて行った。相手のガンダムは外したことに動揺したのか次の攻撃までに間隔が空いてしまう。
「飛び込んでやるさ！」
アルフォンスは機体をジグザグに動かしながらガンダムへと迫っていく。相手も次の攻撃で確実に当てるためか額のアンテナが下へと下がりその奥からカメラが出てくるのが見えた。
「これでどうだ！」
相手がトリガーを引く直前に機体をモビルスーツ形態へと変形させ、空気抵抗を増やし、その場から失速する。そのおかげで機体が重力に引かれ、２発目のビームは額の上を通り抜けることとなった。
「その程度かよ……！」
アルフォンスはビームライフルを構えてガンダムに発砲する。咄嗟に機体を動かしたガンダムは空へと浮き上がる。その隙にさらに踏み込み、ビームサーベルを抜いて斬り掛かる。
ガンダムは腰からピストルのような物を抜き連射をするが、アルフォンスはシールドを掲げながらタックルするのに切り替える。迎撃出来なかったガンダムはまともに体当たりを喰らうもライフルを撃ち、フラウロスのシールドを吹き飛ばす。
「あの体勢で正確な射撃をするとは！」
再びビームライフルを構えてガンダムを狙うが、相手はスモークを放ち視界を奪って撤退したようだ。

「……まぁ初戦にしては上々か」
アルフォンスも機体を翻し、変形させて輸送機へと帰還するのだった。
□□□□□□
「くそ！なんなんだ、あの機体は……！」
「データナシ、データナシ」
撤退するデュナメスの中でガンダムマイスターであるロックオン・ストラトスは憤慨していた。思えば、あの戦闘は落とされてないだけマシなだけのひどい結果だ。
「機体性能も、フラッグやティエレンとは全く違う……どうなってやがる……」
ひとまず、ロックオンは戦術予報士であるスメラギへと報告をするために内容を詰めていくのだった。
□□□□□□

ガンダムを撃退したアルフォンスに待っていたのは称賛の嵐だった。様々な人に祝福され自分の部屋に帰る頃にはすっかりヘトヘトにさせられていた。
「……それにしても……不意を打ったとは言えこうも容易いものなのか……？」
ガンダムの動きを見ると、動揺していただけであり正確な戦闘能力を見れていないのが実情である。
「まだまだ改良の余地がありそうだ」
そう思うとアルフォンスはすぐさま作業に取り掛かるのだった。

第４話

ソレスタルビーイングが武力介入を開始してから世界各地の戦闘は目に見えて減っていた。だが、それは世界から戦いが消えているのではなく、ひとつの敵に対して協力するという方向に移ったからであった。

□□□□□□

「おお！ついに完成したか！」

「ああ、君専用のフラッグだよ」

ユニオンの格納庫で歓喜の声をあげるグラハムと微笑みながら解説をするビリーが並んでいた。

「やれやれ……とりあえずこのフラッグはアイリス社特製の試作ライフルを装備してるからね。ガンダムの装甲に傷をつけるぐらいの威力はあるはずだよ」

「それに……出力も上がっているみたいではないか」

「まぁね、アルフォンスの提供してくれたガンダムのデータもフィードバックしてるからね、この前よりは戦えるはずだよ」

このフラッグの開発にはアルフォンスも関わり、対ガンダムの機体として要求されるスペックは満たしているもののそれでもまだ遠い目標である。

「俺のガンダムのデータを持ってしても、彼らのガンダムと互角かそれよりも下にはなるだろう」

「アルフォンス、君は随分辛辣だな」

「事実だしな、だが……これで奴らが全く敵わない敵ではなくなったわけだ」

こうしてユニオンは対ガンダム調査隊を新設し、その部隊にはガンダムとまともに戦えるような性能のフラッグが続々と配備されることになるのだった。

□□□□□□

「なに？人革連が宇宙でガンダムと交戦しただと？」

フラウロスの整備をしながら入ってきた情報にアルフォンスは聞き返した。
「そうか……結局人革連はダメだったのか」
「そうみたいだね。これで人革連とユニオンは距離が縮まるわけだね」
「……まったく、嫌な世界だな」
アルフォンスはため息をつきながら機体を整備する。
「そうは言ってるけど、君だってその機体の整備を楽しそうにしてるよね？」
ビリーはため息混じりにアルフォンスへ向けて言う。
「まぁな、この機体を使うことは確実だしな。整備しておくことに間違いはないさ」
そしてしばらくして前回の戦闘で見つかった問題点を解決するためのアイデアも取り込んで機体を改良するのだった。
□□□□□□
「まさかガンダムにこうまでしてやられるとは……」
人革連の司令室でロシアの荒熊こと『セルゲイ・スミルノフ』中佐は頭を抱えていた。先のガンダム鹵獲作戦にて、機体を確保する1歩手前まではいったものの、みすみすと逃げられてしまい作戦は大失敗に終わったのだった。
「君の責任がないというわけではないが、やはり我々は奴らの力を見くびっていたようだ」
総司令官であるキム中将は慰めるように言葉をかけるがスミルノフ中佐は納得しておらず苦虫をかみ潰したような顔を浮かべていた。
「次の機会があれば必ず仕留めます」
「そうだな……その前に、我々人革連としては独力でのガンダムの確保は困難だという結論に至り、ユニオンとの合流を極秘裏に行おうと考えている」
「なんと……ユニオンとでありますか……」
数世紀に渡ってユニオンと人革連はあまり友好的ではなく、どちらかというと旧世代の冷戦に似たような状況ではあった。

「……こうも世界が変革していくとなると複雑なものがありますね」
「それが奴らの狙いだと思うが、我々はそうしなければ行けない所まで来てしまったようだ」
　人革連がユニオンとの合流をすることになり、世界は次第に統一されていこうとしていた。
□□□□□□
「そうか……人革連はついに合流することに……」
　グラハムからの電話で事の次第を理解したアルフォンスは深いため息をつく。
「どうした？君がそんな風に溜息をつくのは珍しいな」
「いや……これからはガンダムと世界の戦いかと思うとな」
　いくら家系がガンダムと関係していたからとはいえ今のソレスタルビーイングには何の感情も抱いてはいないが、それでも少しばかりは気にする部分もあるわけで、複雑な気持ちが胸の中で渦巻いていた。
「ところで話は変わるのだが……来月に大規模合同軍事演習があるのは知っているか？」
「いや、初耳だが……」
「そうか……その軍事演習なんだが、実情は３国合同でソレスタルビーイングを叩くらしい」
「……そういうことか」
「ああ、そして我々は恐らく主力として作戦に参加することになるだろう」
　アルフォンスのガンダムとグラハムのフラッグがこの作戦の戦力の中で最も高いであろうことは容易に想定できる。そのため、敵を消耗させた後に本隊が攻撃をするというわかりやすい作戦が取られる。
「分かった、それまでには完璧に調整しておくさ」
　その後、少しだけ世間話をして電話を切るとアルフォンスはガンダムのところへと向かう。格納庫に着くと慌ただしくフラッグの調整をしている整備員達がよく見えた。
「これから先、何が起きるか分からないが……今はできる限りの事は

しておくさ」
　1人そう呟くと整備員に混じって機体のチューンを始めるのだった。
□□□□□□
　そして、三国合同軍事演習当日になった。どの国も既に作戦の目標であるガンダムの撃破、あるいは鹵獲に向けて準備を開始している頃だろう。アルフォンスもまた、同様に機体の最終調整を行っていた。
「受け持ち区画にガンダムが入ってくるまで戦闘ができないのに精が出るね」
「そうか？いつ彼らが入ってくるのか分からない以上、備えておくことに越したことはないさ」
　するとその横ではグラハムがソワソワしていた。
「……どうやら君以外にも待ちきれない人がいるみたいだね」
「むっ、それはどういうことだ？」
「……やれやれ、分かってないのは本人だけかい……」
　ビリーは2人を見ながらため息をつくものの喜んで整備を手伝うのだった。
　しばらく時が経ち、演習区画内にテロリストと思われる機体が出現した。どうやら狙いは原子力発電所のようだ。
「この状況でよくやるよ」
「そうだな……だが、この状況ではソレスタルビーイングも動かざるを得まい」
　すると案の定一部地域でのレーダー反応が消失するのを確認することが出来た。
「ビンゴだ、彼らが来たぞ」
　瞬く間にテロリストの機体を撃破した彼らはすぐさま戦域を離脱しようとするがその前に人革連の物量による砲撃を受けて釘付けにされてしまった。
「ここからが本番だな」
　アルフォンスとグラハムは立案された作戦通りに出撃するために待機をする。

その後はしばらく戦闘が続き既に時刻は深夜を回っていた。ソレスタルビーイングの面々は疲労困憊になっておりまともに食事すら取れない状況だろう。
「では出撃するぞ！」

ＭＳＷＡＤの面々がグラハムに続いて出撃する中でアルフォンスもガンダムに乗って待機をする。
「アルフォンス少尉、出撃準備完了です」
「了解した、アルフォンス・クレンズ出撃する」
ガンダムフラウロスを飛行形態に変形させると真っ直ぐにガンダムの所へと向かうのだった。

第５話

「アルフォンス、既にこちらはガンダムを視認したがお前は今どこにいるんだ？」
「青いガンダムの方へと向かっているところだ」
　司令部の情報によればＡＥＵの受け持ち空域で足止めしているということらしいが、敵としては別ポイントで合流するために予め集合地点を決めているはず。そう確信して先回りするために機体を飛ばしている状況だった。
　そしてその読みは正しく、前方に特殊粒子の反応を捉えたのだった。
「……違う、あれは標的のガンダムではない……!?」
　確かに特殊粒子は捉えたのだが、それは青白い粒子ではなく真紅色の粒子だった。見つかったことを認識したのか相手もこちらへと振り向く。
「……ははっ本当に……楽しませてくれるよ……！」
　アルフォンスはペダルを踏み込み一気に機体を加速させる。その挙動に相手も答えるかのようにビームサーベルを展開させこちらへと振り下ろしてくる。
「ふっ！」
　ビームサーベルを抜かずに肩のフィンスラスターで機体を急激に捻らせてギリギリで振り下ろしを躱し、その反転スピードをつま先に乗せて相手の背中を蹴り飛ばした。
　蹴られた相手は吹き飛びながらも右手に装備したビームライフルでフラウロスに攻撃してくる。だが、苦し紛れの攻撃に当たるほどの腕でもなく機体を左右に揺らしながらどんどん距離を縮めていく。
「貰ったぞっ！」
　ギリギリでビームサーベルを展開させ敵の胴体部へと突き刺す瞬間に横合いからの粒子ビームが飛んできた。咄嗟に腕を引き敵を蹴り飛ばしながら後退する。
「水入りか……」

そこに居たのは背中に大きなビーム砲を装備した機体だった。さっきまで相手をしていた機体はその新しく戦場に出てきた機体の横へと移動した。
「2対1か……やれなくはないが……」
その時、全方向に対しアラートが鳴った。急いでペダルとレバーを操作して機体を動かす。さっきまでいた位置に小型の何かが通って行ったのを確認することが出来た。
「……3対1かよ……」
エネルギーゲージはまだまだ余裕があるものの、さすがに未知の攻撃が多く確実に勝てるという確信は無かった。だが、こいつらを放置すると追っていたガンダムを助けに行くだろう。
何度か本部に連絡を取ろうとするも特殊粒子の影響下のためまったく通信が出来なかった。
(この状況で足止めをすればガンダムは他の部隊が落とすだろう……)
しばらく睨み合いが続き、そしてビームライフルを構えて大型のバスターソードを持った機体へ向けてトリガーを引いた。それに反応した機体が銃口から逃れるように視界から外れようとする。
その後に背中にビーム砲を持った奴がアルフォンスへ向けてビームを放つ。そしてビームをすり抜けるようにもう1機が距離を詰める。その攻撃を避けながらビームライフルで狙った敵に近接戦闘を仕掛ける。
相手は待っていたとばかりに両手でバスターソードを持ち横薙ぎに払う。アルフォンスはその剣をいなすように、左腕のシールドでバスターソードをはね上げた。
「隙だらけなんだよ!」
がら空きの胴体へ向けてビームライフルを向けるが次の瞬間、ビームライフルが爆散し機体が後ろへと押し流されてしまった。
「ちっ……あの小型兵器が厄介だ……」
ビームライフルを破壊したそれは再びアルフォンスへと不規則な機動を伴って迫ってくる。機体をジグザクに動かしながらその親機

へと迫るが、他の2機の援護攻撃を受けているためどうにも対応ができない。
「……なんだ？撤退するつもりか……！」
大事なミッションがあるのか相手の3機は次第に後退していた。そうはさせじとスラスターを吹かして距離を詰めようとするがいつの間に居たのか2基の小型兵器がスラスターに突き刺さった。ちょうど、点火したタイミングだったため、背面で爆発が起き推力が低下する。
「ぐぁぁぁ!!」
すぐさまスラスターを封鎖するものの機体ダメージはそれなりに大きくこれでは戦闘が困難な所までしてやられた。気がつくと相手をしていた3機は既に索敵範囲外へと移動していたのだった。
「くそが……！」
アルフォンスは悔しさのあまりコンソールを殴りつけ次に戦う時はこの雪辱を晴らすことを誓うのだった。
□□□□□□
今回の三国合同軍事演習という名目のソレスタルビーイング殲滅作戦は、新たな3機のガンダムの存在により瓦解し、甚大な被害を負って終了したのだった。これにより、当初は難色を示したＡＥＵの上層部もユニオン、人革連との同盟を結ぶ方向へと舵を切り世界は1つへとまとまろうとしていた。
また、とある場所にて、各国の代表者を集めた会堂がありそこでお披露目されたのはガンダムの動力源である『ＧＮドライヴ』だった。なんと、これをそれぞれの国へ１０基ずつ、計３０基の無償提供及び機体の設計図の提供などがなされ、これも世界の統一化の流れの後押しとなった。
□□□□□□
「……まさかこんなことになるとはね……」
テレビの画面では国連軍の結成という題目でニュースがやっていた。あの後、世界は遂にひとつとなりソレスタルビーイングを殲滅するという大きな目標が立てられたのだった。

ガンダムと同等レベルの機体の設計図、そして動力源……これらが提供されたのだが、その裏には何かあるのではないかという勘ぐりを捨てることは出来なかった。
「……いずれにしたって世界がまとまるならそれでいいさ」
そう言いながら席を立つアルフォンス。
「おや、こんな時間にどこにいくんだい？」
「ちょっと約束がな」
時計を見れば既に深夜１２時を超えており心配するビリーの声を背に部屋を出ていく。そして向かった先は自分の機体が格納されている格納庫だ。
「……」
格納庫へたどり着くとそこには先客がいた。何人もの兵士がこちらへと銃を向けていた。
「……おやおやなぜこのような事を？」
「知らん、私達は命令に従ってやっているだけだ」
「そうですか……それは残念です」
そう言うとアルフォンスは携帯端末を起動させた。次の瞬間、フラウロスが起動し近くにいた兵士に向けて頭部のバルカン砲をばらまいた。突然の出来事に混乱する兵士たち。その隙を突いて物陰に隠れるアルフォンス。
「やってくれるよ、ほんとにな！」
アルフォンスは隙をついてフラウロスの脚部分に取り付く。それと同時にフラウロスの腕部バルカンを起動させて兵士を薙ぎ払う。
「ぐはっ……！こんなことで……!!」
瀕死の兵士がマシンガンを持ってアルフォンスに向けて引き金を引く。それを遮るかのようにフラウロスの腕がアルフォンスを守った。
「……残念だったな」
その兵士が事切れるのを見届けてコックピットに乗り込み完全に起動させる。
「ふん……そうか彼らは俺を不要としたか……」

アルフォンスは予備の武器である『バスターライフル』を取り出し右腕に装備して格納庫から飛び出した。それを逃すことは無く追っ手として数十機のフラッグがスクランブルで出撃してきた。
「悪いがもう、容赦はしない」
バスターライフルを構えてトリガーを引く。一瞬のため時間の後に極太のビームがフラッグの編隊の中心に突き刺さる。圧倒的な威力の前に為す術無く消し飛ぶフラッグに他の機体が硬直した。
「突破させてもらうぞ」
空いた陣形の穴を機体を変形させて一瞬で突破する。圧倒的な速度についてこれる訳もなく瞬く間に距離を開ける。
その時後ろから猛烈な勢いで迫る一機のフラッグがレーダーに反応した。
「……グラハムか」
「アルフォンス！なぜこんなことをした!!」
「殺されそうになったからな」
飛行形態のままグラハムの攻撃をかわす。
「そんなことが！」
「あるからこうなってるんだよ！」
痺れを切らしたグラハムがさらに攻撃を加える。思いのほか照準精度が高く機体にかすり始めた。
「……悪いなグラハム、ここで落とさせてもらう」
「くっ……！」
機体を変形させ、腰部からビームサーベルを抜き切りかかる。グラハムも機体を変形させて改良したプラズマソードを抜き受け止める。切り結んでいる部分からプラズマが迸り互いに拮抗した状態になる。
「奴らはガンダムと同等な性能のモビルスーツを得たから邪魔になったんだろう」
「そんなことをするはずないだろう……！」
「ふんどうだか」
１度機体を後ろに下げて腕部バルカンをばらまく。その牽制射撃を機体を揺らしてかわしこちらとの距離を詰めてくる。

「ここで決着をつけてやる！」
「いつぞやの模擬戦の続きか？今回はそういうものではない！」
フラッグが近づいてくるのに合わせて機体を滑らせ一瞬でフラッグの下半身をビームサーベルで切り裂く。
「なんと!?」
「さよなら、グラハム」
振り返ること無く機体を変形させてその場を立ち去るのだった。
□□□□□□
グラハムとの戦いから数日経ちアルフォンスは別荘に隠れていた。そこの近くにはユニオンの基地はなくまた、このような場所に別荘をもっているということは他の人には知られていなかった。
「これからどうするか……」
いっそのことソレスタルビーイングに合流するのもいいかもしれない。そんなことを考えていた矢先にアラートが部屋に鳴り響く。おまけにこの反応はソレスタルビーイングのガンダムだ。
「だがこれは……赤い色の粒子……ははっこの前の決着といこうじゃないか……！」
アルフォンスはすぐにフラウロスに乗り込むとその機体を追い掛けるべく出撃するのだった。追いかけることしばらくすると、敵は太平洋上のとある島へと降りていくのが見えた。仕掛けるためにそこに対して強襲をかけようとした所で、一機のイナクトがその島に降りていくのが見えた。
「……どういうことだ？」
怪しく思い機体を降下させるとそこでは1人地面に倒れ込み、ガンダム同士での戦いが起こっていた。
「奪われたのか……だが、これはチャンスだな」
その戦いに介入するためにバスターライフルを構え大剣を持った機体をロックオンする。その機体はロックオンされたことに気づいたのかいとも容易く射線から逃れる。
「そこの機体、援護を感謝する」
「残念だ、どちらの味方でもないのでな」

今度はランチャーを持った方に対してバスターライフルを撃った。相手は間一髪のところで回避し、追撃をしようとした所で後ろから大剣を持った機体が攻撃を仕掛けてきた。
「邪魔すんじゃねぇよ！」
「こっちの機体は……かなりの乗り手だな……！」
バスターライフルを腰に移動させてビームサーベルでその大剣を受け止める。敵はビームサーベルと切り結んだ瞬間に剣を引き右手のハンドガンでこちらのコックピットを狙ってきた。
その攻撃をフィンスラスターで回避し、その勢いで回し蹴りを繰り出すも剣の腹で受け止められる。
「もらった……！」
その隙に射撃型の機体がこちらを巻き込む射線を確保し極太のビームを発射する。瞬時に機体を変形させて射線から逃れ、剣を持ったやつも射線から外れた。機体を変形させたことで距離が離れてしまい、その隙に剣の機体が射撃型の機体を一刀両断した。
そして今度は逃げようとしていたもう1機に攻撃をしようとしていたが、横合いからのビームに邪魔をされて間合いをあけた。
「あの青いヤツか……！」
そして今度は青い機体と大剣の機体との戦いが始まるのだった。青い機体の方のパイロットも技量はそれなりに高いが動きがどこか直情的でまだ若いことが伺える。
「蔑ろにされるのは性にあわないが……」
エネルギーゲージを見ると既に半分を切っていて戦闘では少しばかり心元なかった。だが、それでもどこかで介入はしたいところだ。そして、戦いは赤い方の機体が青の機体の死角に回り込み切り伏せる寸前にまで推移していた。
「ちっ！」
フラウロスにバスターライフルを構えさせるが着弾が間に合う保証はなかった。だが、その攻撃をする必要はなかったみたいだ。
「なんだ……あれは……」
突然青い機体が赤く輝きだし残像を伴うレベルの機動性を発揮し

たのだった。あまりに突然の変化で有利だったはずの赤い機体は撤退することを選択したようだった。
「なるほどね……で、次は俺ってわけか」
あの機動性を相手に勝てる気はしないが食らいついては見せるという気概でビームサーベルを抜くが、相手の機体は元の色に戻り、背中の出力も落ちているように見えた。
「……今がチャンスか」
俺はサーベルをしまい、バスターライフルを下げると光通信で交渉をしたいという旨を伝えるのだった。